

研究課題 (テーマ)	アクティブラーニング手法を用いた言語教育法の試行		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	教養教育	教授	原口 志津子
			総合科目教員・外国語科目教員
研究結果の概要			
<p>学生が意欲的に学習に取り組み、大学生、社会人にふさわしい言語運用能力を身につける教育法の開発・試行を研究内容とする。研究分担者は、総合科目教員および外国語科目教員である。</p> <p>まず、英語実力テストと日本語能力基礎テストとを行い、現状把握を行った。これらのテストは英語については平成 21 年度以来、日本語については平成 23 年度以来行われており、経年変化の分析を継続している。</p> <p>英語科目は、非常勤講師数が多いため、各科目に専任教員をリエゾン教員として配置しており、リエゾン教員が非常勤講師 FD を主催する。例年のことではあるが、平成 26 年度は新カリキュラムの完成年でもあり、その効果あるいは不足について検討を行った。</p> <p>日本語表現チェックリストとアクティブラーニングに関する検討会も 5 回行い、外国語科目担当教員と基礎科目教員も参加した。その結果、以下を実施した。</p> <p>①日本語表現チェックリストの改善</p> <p>平成 25 年度には、英語の writing 科目の添削において現在用いられているチェック項目と対応する形で、日本語表現のチェックリストを作成した。日本語、外国語の枠を超えて、論理的な文章を書く方針を浸透させるためである。平成 26 年度はその改善を行った。</p> <p>②学生相互のピアレビュー、ペアワークの試行、実施</p> <p>英語科目においては、ペアワークやグループワークがすでにとりいれられているが、1 年次必修科目の「日本語表現法」においても、学生にペアを組ませ、学生の作成した文章についてピアレビューを行わせた。</p> <p>③日本語表現チェックリストの利用拡大</p> <p>総合科目の「芸術学Ⅰ」「芸術学Ⅱ」「人間と文化」において、学生提出物を添削し、返却、再提出を求める際に、新教育プログラムで開発した日本語表現チェックリストを活用した。また、学生相互のピアレビューを試行した。「教養ゼミ」「トピックゼミ」の一部において、レポート作成の際に、日本語表現チェックリストを適宜改編したリストを用いるゼミも増加した。科目の枠を超えて、書式、論述形式にセンシティブとなるべく、学生を指導するなどの改善が行われた。</p>			
今後の展開			
<p>英語については、少人数教育を行い、グループワーク、ペアワークがすでに行われているが、「日本語表現法」においても、ペアワークなどのアクティブラーニングを推進する。また、日本語表現チェックリストの内容を漸次改善し、他の科目における利用を広めてゆく。</p>			